－所蔵作品紹介－

川俣　正　KAWAMATA Tadashi

PROJECT"TETRA HOUSE N-3 W-26" SAPPORO 1983

ぷろじぇくと"てとらはうすN-3 W-26"さっぽろ1983

作品データはこちら　《全景》
《マケット》

川俣正は北海道三笠市に生まれ、東京芸術大学美術学部油画科に学び、1984年に同大学院美術研究科博士課程中退。1979年に発表を始め、国内はもとよりヴェネツィア・ビエンナーレ（1982）やドクメンタ（ドイツ・カッセル、1987、1992）への出品、トロント（カナダ、1985）やニューヨーク・ルーズベルト島（1992）でのプロジェクトなど、80年代から現在まで国際的に活動している。

80年代の初め、彼はまず、建築物の内外に廃材となった板を張りめぐらすインスタレーションで注目を集めた。それは見慣れた風景の中に、川俣の言葉を借りれば「侵略」「侵入」「侵価」という不穏な意図を持った働きかけを行って空間を変質させ、日常に安らぐ人々の意識をゆすぶったのである。1987年のドクメンタ７あたりから彼の仕事は都市や歴史意識への批評的性格を濃厚に帯び始め、その仕事の射程がいっそう拡大することになった。

インスタレーションは特定の場所で期間を限って成立するため、居合わせなかった者は記録で追体験するほかない。当館では川俣が1983年に札幌で行ったアパートメント・プロジェクト「テトラハウスN-3 W-26」の関連資料を所蔵しており、ここにあげたのは実景の記録写真と、プロジェクトのためのマケット（模型）である。マケットの台は、現場での木組みの基本形に従っている。もっとも作家本人は、マケットは雛形でも忠実な記録でも無い、という。ならばむしろ私たちはそこに、手と眼によって深められて行くダイナミックな空間思考を見るべきであろう。それも素材の大きさや重さという物理的条件に拘束されない分だけ、自由さと初発性を失っていない思考を。あるいはもう少し平たく言い切ってしまえば、世界をミニチュアによって考える楽しさ、つまり模型作りならではの楽しさを感じ取ってもよいのではないだろうか。

*引用は「川俣正・仮設としてのプロジェクト（川俣正＋正木基・対談）（『ニュー目黒名〈画〉座・川俣正展』図録、目黒区美術館、1993）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より